

赤になつて了つた。

夏の路

水野仙子

平らかに、時々は廣く迫く、紆曲つては叢のかげに隠れて、またからりと白く現はれる村の路に、牛乳屋の車が新しく轍の跡を薄くつけて行つた。白い脚絆に白い腰巻を下げて、浴衣に締めたる黒縹子の帯に、端折つた裾を挟んで、袋を袈裟がけにした肥つた老女が、同じやうな装束をした二人の男の連れと並んで、手拭ひで汗を拭きながら擦れ違つて行つた。札所廻りの人達であらう。

そよ／＼と無暖い風が吹くと、右手の左手の、南爪畑に丸い葉が揺めいて、一樣に葉の裏の白いのを見せる。黄色い花の間々の下には、まだ花の名残りとどめた青い不格好な實が、覗いてるのあれば隠れて居るものもある。

葉を踏む響とも違ふ一種のそよめきは、青葉の下に細い徑をわけてはじめてそれを知ることが出来る。

徑を出外れて萱の繁みに隠れることしばし、竹藪の涼しい中に路は續いた。根元に皮の袴を抜いた今年竹が、冴え／＼として發育の色を見せて背丈を競つて居る。間もなく葦屋根の一つ二つが、歩くにつれて青葉を揺くるやうに現はれて來た。低い軒の前には、緋のやうな石榴の花と、穂のやうに咲いた紫陽花の花の下に、一家の人達はそれ／＼な仕事にうつむいて居る。

まだ生々しい土の馬鈴薯が、薄紅色の色を覗かして山のやうに積まれてあつた。いづれも足音に顔を振りあげて私を見る。こゝと何かを喰んで居た鶏の一族が汗を拭く半巾のひらめきに怖れて、玉椿の垣の根元を潜つて去つた。樫の樹を心にして積みあげた藁にふの下には、去年の落葉が朽ちもせずに喰み出て居る。

いつかまた稍々廣やかな村の路に合して、當て途もなく歩いて行くと、路の曲り角に一二軒の家が見える。「はい四十三錢五厘！」と突然聲が起つて、汚い服装

女子文壇 本

欄

(四二)

刈られて野に伏した麥の畝の間には、紫の莖の色濃い茄子や、畑によつては小豆と思はれる葉の形の、柔かさうなのがあら／＼して居る。胡瓜の手に蔓も背高のびて、白い粉を着た細やかなのが、葉隠れのところ／＼に下つてゐるのが見える。馬鈴薯畑、大根畑、隅には坊主になつた葱などが寄せられてある。腔深く泥につかつて、水田を掻いて居る人の影が青葉とともに揺れた。

樹陰を々々選つてついで草の繁つた道に外れると、薊や草薺の色がまづ目を引く。黒い程線の濃い杉の低い森、すく／＼とした其足間から、新しい家の腰が見えて、柵の中には白と黒の斑や茶の斑の牝牛が、寝たり起きたりして、懶々／＼に體を抜かつてゐるのが見える。

柵の林の小路を潜れば、足音に驚いて枝から枝にところを變へた小鳥の羽音に、不意のこととして此方も少からず驚かされて、心持ち濕つた草深い路に日かげが折々／＼として、風吹けば音なく揺れる草に音があり、落

をした女が店先に立つた。古煤けた家には燐すやら煙草やら駄菓子などが並べられてある。和洋御菓子と箱車に書いた卸し屋が、「へえ有難う」と言つて箱の戸をびたんと音たてて閉めた。

「四十三錢五厘、あるでせう、よく數へておくんなさ

い」

私の後には錢の音が高く残つた。軽い欠伸が口を衝いて出ようとしたので、私は初めて足の疲れを知つた。歸らうとするでもなく、また何處かへ出ようといふ目的もなく、たゞ道の續くがまゝ、曲るがまゝに委せて歩いて居る。かうして今日も午後

の散歩の日課を踏んだ。

ふと朽ちた山門を控へた墓堂のお堂の前に出た。桑の葉の繁つた垣を分けて、横から境内にはいつて見ると、松や櫻や樺などの樹陰に、簞の跡が涼しげに行き

届いて居る。

不動明王と金文字の出た正面の額を見あげて、試に

(四三)

鐙口の綱をとつて一浪打たせると、鈍い籠つた音が思ひの外低く響いて、途端に白い鳩が一羽お堂の中に翼の音をたてた。

下駄の音が堂の床に高かつたので、心して寄つて暗い格子の中を覗いて見ると、矢の中に剣を手にして立つた不動明王の御像を正面にして、赤地の幕には定紋打ち太鼓やら提灯やら、眞鍮の燈籠などが飾りたてられてある、暗いなか光つて居る御鏡には青葉の影がうつつて居た。

一通り奉納の額を見廻して、まづ目の据つたものを調べると、牡丹に唐獅子の大きなものには、天明二壬寅年七月吉祥日と書かれてある。加藤清正が虎退治の繪の幼なげなのもあれば、日露戦役に出征した村人の名がづらりと書かつて額になつて居るものもある。大關とある蒔包みの酒樽を書いて、その前に大きな和鏡を書き、明王の前に手を合せて居る男を書いたのなどは、禁酒の願の積りであらうと微笑まれ、明和五年戊子七月吉日、願主市村座留場市右衛門とやうく判じ讀ま

に乗つてあらはれて居る。左の隅にはお宮があつて、突き袖をした内儀が、縞の羽織を着た夫と子供の一行に、供の者を連れて鳥居を潜らうとしてゐるところがある。全面に渡つて一面に金箔を散らしてあるので、群青色や朱や胡粉などの、けばくしい色と相俟つてなか／＼華やかである。

繪もかう具體的に書かれては、はゝあゝ其の意味が呑み込めて、ひとりで興を催して居ると、猶其額の傍に御家流の字で由緒書きがしてあるのに目がついた。書かれた板が古びて居るところへ、ところ／＼汚點も出来て居るので、いくら目を澄しても／＼續けて讀み得ることが出来ない。嘉永四年正月本多様お成……と讀んであとはわからず、私儀廿五歳の春家業修行の爲とやうく判じてまた讀く。子供風揚げ居たるが、ふと右の風箏馬の首にかゝり、右馬驚きて……氣絶えたり。よふ／＼氣が付き候へども足背くちきて痛み強き故、道遙かなる醫師たのみ、且早々歸府いたし、種々養生いたし候へども歩々しくも難儀……首が痛くなつた。涙が溢れさうになつた眼を押へて

れる古びた額には、白拍子と殿様風な立つた男と、碁盤に腕を掛けた奴風な男が書いてあつて、顔を染めた胡粉ばかりが白く繪の名残りとどめて居る。

そのうちに珍らしいのが一つあつた。額の大きさは一間もあらうと思はれる程で、馬具を置いた栗毛の馬が、何かに驚いて白い眼を剥き出して躍り狂つて居る足の下に、商人風に髪を束ねた旅装束の男が踏み倒されて居る。笠を着たり挟み箱を擔いだ男が二三人驚いた形装をして居る中に、手綱を持つた馬子の驚き顔は至極おどけて居る。猶よく／＼見ると、馬子の後に袖無しを着た童が、奴風を持つたまゝ逃げて行かうとして居る。すると今度は畫面の右に持つて来て、石垣を書き竹の矢來を書き松の樹を描き、馬の脚の下男と同じ着物を着た男が、床をのべて寝て居る枕許に薬の袋と茶碗が一つお盆に乗つて居るのは、病床のことを意味してゐるであらう。取り廻した二枚屏風のかげからは、淺黄の風呂敷包みが覗いて居る。遙かに上方に當つては、二人の童子を連れた不動王の尊體が雲

猶讀み取らうと苦心する。

ある夜兩親夢のうらぐとなく病人怪我はもと
の身になほす……といふものあり、ゆめさめはつと思ひかゝるも兼ねてねんする不動尊のおつげとお寺参詣して……大丈夫なり行家事向諸御大名様御出入は勿論萬事盛運となる事まつたく當不動尊のお影、利益益々廣大御禮のため右少額を奉致 敬白もの也、安政四丁巳稔春王正月元旦。

骨を折つてから讀み取つて、熱く痛くなつた目をしてばたいて、も一度額面をづらりと見渡した。いかにしても長らく上ばかり見つめて居たので首が痛い。ふらりと其處を出て境内を横山らうとすると、松樹の根元によせかけた圓みが、つた石に、誰の句か彫んであるのが目についたので、今度は其前に蹣んでためつすがめつして見る。はせをとしてある。

昏かき山谷過ぎけり紙草履。
夕日にいつか樹の間を洩れて居た。葉といふ葉をよめかす風は、夕べとなつて殊に武藏野の野の面にさめき渡つた。